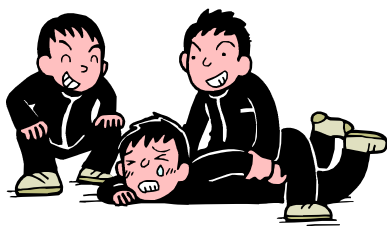


# 発達障害児の基本的理解



総合教育センター  
特別支援教育室

# 発達障害のある児童生徒の理解

## 1 学習面の問題

発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症等）がある児童生徒は、学習につまずきを抱えるケースが多く見られます。小学校に入学し、毎日の授業に集中することが困難であったり、自分の力で課題に取り組むことが難しかったりする子が見られます。また、小学校の高学年から中学生になると、学習の進度が早くなったり、課題の量が多くなったりします。さらに、中学校からは、教科担任制になることで、一人の生徒の学力を総体的に見ることが困難になりがちです。

「勉強ができない子」  
「きちんと聞いていないからわからない子」  
「(中学生としての)自覚が足りない子」  
「家庭学習が不足している子」  
「できないとすぐあきらめる子」  
「忘れ物が多い子」  
「提出期限が守れない子」 等

( 学生、 年生なんだから )  
「もっとしっかりしなさい」  
「よく考えなさい」  
「何をすればよいかわかるでしょう」

特別な支援が必要

\* なかなか改善されない

・ 外国の調査では「ADHDがある児童生徒は、50～70%の割合でなんらかのLDを伴っている」という結果が出ている。

## 2 対人関係の問題

発達障害のある児童生徒（特に高機能自閉症）の中には、一見みんなから離れて一人だけの行動を好むように見える児童生徒がいます。中には、一人でいることを好むケースもありますが、実は他人の考えていることへの関心が薄かったり、友達と上手にかかわった経験がなかったりするためにどうしてよいかわからないている場合があります。同時に、他人との距離の取り方も上手ではありませんから、必要以上にべたべたしたり、急によそよそしく離れてしまったりすることもあります。

また、年齢相応の社会的な行動や、状況に合った行動が身につくにくいため、年齢より幼い行動をとったり、状況判断の弱さから自己中心的な判断をしたりしがちです。見当はずれな行動が増えてきますので、結果として教師や親からの注意が増えたり、仲間はずれにされたり、いじめられたりしがちです。

## 3 発達障害を理解するポイント

### (1) わかっているても実行できない

「授業に集中しなくては」 ⇨ 集中力が途切れる  
「席に着いていなくては」 ⇨ つい立ち歩いてしまう  
「話を最後まで聞かなくては」 ⇨ 言葉に衝動的に反応してしまう  
「教師や親の言うことを聞かずに何度も同じ失敗を繰り返してしまう」「場当たりの行動の増加」

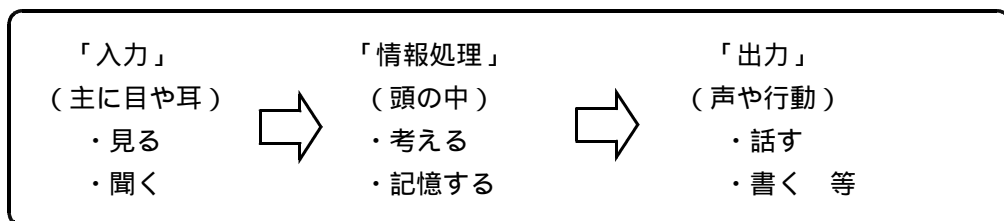
・ 教師や親：「わかっているならできるはず」「やる気がないから」と意志の問題としてとらえがち  
・ 児童生徒：「なぜ自分はできないのだろう」「どうして何度も繰り返してしまうのだろう」と悩む

### ワーキングメモリーと実行機能

・ ワーキングメモリー（作業記憶）とは、短期記憶の一つです。物事を考えたり、作業をしたりするときに頭の中に浮かべておくメモリーです。聴覚性や視覚性の他に、身体運動に関するワーキングメモリーがあります。  
・ 実行機能とは、普段の生活の中で、物事を思いついたときにそれをすぐ実行するのではなく、いったん保留し、様々な状況を踏まえた上で、最適なものを実行するという機能です。一般的に年齢を重ね、経験を積み重ねることによって機能が充実してきます。

発達障害のある児童生徒はワーキングメモリーと実行機能が不十分である

## (2) 情報処理の困難



通常はこのような一連の流れを意識しなくとも自動的にやっています。

発達障害のある児童生徒は情報処理の過程に恒常的なつまずきをもっている

その結果、全般的に知的な遅れがないにもかかわらず、小・中学校の頃の基礎学力や社会性が積み重なっていかないのです。

## LDの理解と指導

### 1 LDの概論

LDとは、英語の「Learning Disabilities」の頭文字を取ったことばです。日本では、「学習障害」と訳され、文部科学省によると、次のように定義されています。

学習障害とは、基本的には全般的な知的発達の遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」 H11.7

この定義の主要な点は次の通りです。

特定の能力（聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する）の習得、使用に困難を示すこと

・「特定の能力の習得、使用に困難」とは、その個人がもつ能力で、部分的な落ち込みが見られる状態とすることができます。これを図式化したものが図1です。

学習障害の場合、総体的には、普通の人と変わらない能力をもちますが、部分的に大きな落ち込みが見られ、能力間のアンバランスさが特徴となっています。また、部分的に大きく落ち込む能力が調査協力会議の定義によれば、「聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力」となります。

行動面、社会面での問題行動が付随して現れることがあってもそれ自体が定義とはならないこと

・一般的に、学習障害の児童生徒は、特定の能力の落ち込み以外にも、多動などの行動面の課題や人とのかわりがうまくとれないといった社会的な問題を抱えていることが多くあります。学習障害と注意欠陥多動性障害を合併するケースも少なくありません。

## 2 LD児の心理・行動特性

前述の定義で述べた困難の具体例は次の通りです。

### 聞くことが苦手

- ・集中して話を聞き取れない
- ・聞いたことが覚えられない
- ・複数の指示を理解できない
- ・似ていることばと聞き違える

### 話すことが苦手

- ・「てにをは」がうまく使えない
- ・単語だけで話す
- ・質問に対して見当違いの答え
- ・話題がずれていってしまう

### 読むことが苦手

- ・文字や行をとばして読んでしまう
- ・助詞や文末を読み違える
- ・形の似た文字の弁別が困難
- ・どこまで読んだかわからなくなる

### 書くことが苦手

- ・黒板の字を書き写すのが困難
- ・字形が整わない
- ・鏡文字を書く
- ・まとまりのある文章が書けない

### 計算することが苦手

- ・筆算で桁をそろえて計算できない
- ・繰り上がり、繰り下がりが困難
- ・簡単な計算間違いが多い

### 推論することが苦手

- ・文章題の題意を理解できない
- ・単文は読めるが、複数の文をまとめて理解できない
- ・図形をうまく書き写せない

上記の特徴の原因としては、認知の障害（「図と地の混乱」など）があると言われています。

「図」：一番重要なもの、注目したいもの 「地」：背景となるもの、意識の外に置いていいもの

この他、手先が不器用など運動能力の困難を示すこともあります。

### 運動が苦手

- ・体全体の運動が苦手（ボール運動が苦手、スキップや縄跳びができないなど）
- ・手先が不器用（細かい作業が苦手など）
- ・目と手の協応動作が難しい（なぞり書きができない、枠の中に字がおさまらないなど）

### 「発達上の凸凹は誰にでもある」

- ・一般的に知的な水準が高ければ、多少の偏りは他の順調に育っている部分でかなりカバーできる。しかし、全体的な知的発達水準が低くなってくると、わずかな偏りでも不利が生じやすくなる。

### 「脳は知能の整理ダンス」

- ・通常は目や耳から入ってくる情報を、脳で受け止め、照合、整理、関係づけをしながら、しまい込みたり必要に応じて引き出したりする。個々のダンスには、様々なサイズがあったり、引き出しの開け閉め、しまい込み方や引き出し方には特徴がある。知的に発達するにつれて、しまい方や探し方は巧みになる。LD児は、ダンスが小さかったり壊れているわけではない。たまたまいくつかの引き出しがきしんで開けにくかったり、整理をする際の工夫が少し足りなかったりする。そのために時間がかかってしまう。

### 「つまづきやすさの背後にはその子独特の学び方がある」

- ・例えば、  
「記憶」についての弱さを見せる子ども 記憶の負荷を減らす、記憶を助ける補助手段  
方法としては・・・アンダーラインの引き方を教える、段落ごとに状況を説明等

### 3 LD児の指導のポイント

LD児への指導は、日頃授業の中で学習の遅れがちな子どもへ行っている配慮を大切にしながら、LD児の特性に合った具体的な手だてを考えることが重要です。ここでは、授業ですぐに取り組みめるものを紹介します。

#### 指導内容をスモールステップ化

- ・指導内容を細かく段階に分け、見通しをもたせる
- ・「できた」という達成感をもたせる

#### ノートや学習プリントを工夫

- ・罫線やマス目を入れて見やすくする
- ・文字を大きくして、プリント1枚の問題数を減らす
- ・赤ペンなどでポイントを文章化して書き込んでおく

#### 指示の出し方を工夫

- ・注目させてから指示を出す
- ・短いことばで端的な指示
- ・一度に複数の指示を出さない

#### 指導内容の提示や導入を工夫

- ・学習の流れ図、説明図などを提示
- ・身近な事柄や興味を引く内容で注意を向けさせる

#### 指導形態を工夫

- ・チームティーチング
- ・個別指導、コース別学習、グループ別学習など取り入れる

#### 長所を活用した支援

- ・得意なことを伸ばし、自信をもつことができるようにする
- ・得意なことを、教材に取り入れる
- ・皆の前で発表させたりし、自尊心をはぐくむ

## ADHDの理解と指導

### 1 ADHDの概論

文部科学省によると、我が国におけるADHDの定義は次のようになっています。

ADHDとは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び/又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。

また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

「特別支援教育の在り方に関する調査協力者会議」 H15.3

ADHDとは、DSM-5で取り上げられている、「Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder」の頭文字を取ったもので、日本では「注意欠陥多動性障害」と訳されています。同じ概念でも世界保健機関（WHO）では、ICD-10によって「多動性障害」と診断名を定めています。これらは、専門医によって診断される医学用語です。

また、ADHDは「不注意」「多動性」「衝動性」の3つの基本症状によって診断されますが、最近では病因仮説として、行動の抑制やセルフコントロールに關与する脳の機能が発達の段階で傷害されるため、と考えられるようになってきています。

## 2 ADHD児の心理・行動特性

ADHDは前述のとおり、代表的な3つの特性があり、具体的には次のような特徴があります。

### 不注意

不注意とは、注意の選択と配分がうまくできないことです。

- ・注意散漫で、指示や話を集中して聞くことができない
- ・不注意な過ちをおかす
- ・計画的にやれない      ・順序立ててやれない
- ・大切な物をなくす      ・必要な物を忘れる
- ・話しかけられても聞いていないように見える



### 多動性

多動性とは、無目的に動くことを意味します。行動の自己統制が必要とされる状況で最も顕著に現れます。

- ・すぐ席を立ってしまう
- ・着席していても手足やからだ勝手に動く
- ・やたらと走り回ったりする      ・勝手にしゃべり独り言も多い



### 衝動性

衝動性とは、自己コントロールがうまくいかず、判断より先に反応が先行してしまうことです。

- ・話を終わりまで聞かず口をはさむ
- ・順番を待つことができない
- ・会話やゲームに割り込んできたり、じゃまをしたりする
- ・危険なことを考えなしにやってしまう



これらが全て一人の子どもに現れるわけではありません。DSM-5では、「多動性・衝動性が目立つ主なタイプ」「不注意が目立つタイプ」「両方のタイプが混合するもの」とに大別されています。

## 3 学童期後半からのADHDとその予後

中学生年齢では、「落ち着きのなさ」に続いて、学童期に比べて、「不登校」「こだわり」「身体症状」が著しく増加します。さらに、「対人関係の問題」「興奮・乱暴」「身体症状」「学習の遅れ」などがみられます。小学校中学年以降ですと、周囲の子どもの落ち着き具合と比較すると、“多動”は一段と目立ちますし、子ども間の関係においても、“相手のことを考えない”子どもとされ、友達をつくるのが難しく、“いじめ”の対象となることもあります。このころになると、教科による極端な成績の違いや、「漢字はよく書けるが、文章の要旨はまったく分からない」など、同一教科内のばらつきが出現します。

ADHDの予後については、十分な資料がありませんが、アメリカでの調査では、次のような結果が出されています。

ADHD児	┌	30% - 青年期までに症状が消失
		40% - 青年期までに症状が続く
		30% - 症状の悪化や他の障害の合併

また、女子のADHDの場合「不注意優位型」が多く、男子のADHDと異なり、ADHDの障害と理解されないことが多々あります。「授業中の態度が悪い」「生活がだらしない」「遅刻や忘れ物が多い」「努力不足」のレッテルを貼られたり、友達との関係がうまくいかなかったりすることがあります。小学校高学年から中学生の思春期の時期、女子の場合、ストレスのため抑うつ的あるいは、摂食障害などの情緒障害に発展するケースもあります。

#### 4 ADHD児の指導のポイント

ADHDは、本人の努力不足や家庭のしつけが原因ではなく、脳内の神経伝達物質に関する何らかの問題があって生じています。その基本的な理解をもとに、指導や支援の方法を考えていきます。

##### 頭ごなしに叱らない

- ・望ましくない行動の理由を尋ねる
- ・適切な行動等の仕方を教える  
興奮していれば落ち着いてから
- ・叱るときは毅然とした態度で

##### ルール、指示、手順などをわかりやすく指示する

- ・掃除の仕方を示す
- ・授業の準備の仕方を示す等  
手順表は、優先順位を決めて必要な場面を準備

##### 達成可能な努力目標を設定

- ・表にして示す
- ・シールやなどで評価する
- ・自己評価と、先生による評価
- ・評価によって、強化子を与える
- ・徐々に強化子を減らす

##### ほめ方を工夫する

- ・努力している点や身に付けてほしい点をほめる  
「よく先生を見ているね」  
「字を丁寧に書いているね」等
- ・指摘や皮肉を言わない  
×「やればできるじゃない」(指摘)  
×「君にしてはまあまあだね」(皮肉)
- ・強化子(ごほうび)を利用



##### 自分でコントロールするテクニックを身に付けさせる

- コントロールが困難な場面で
- ・約束カードを作り、必要に応じて見る
- ・お守りを身に付ける 握りしめる
- ・深呼吸や体操をする 習慣づける
- ・ことわざで気持ちを表す  
「失敗は成功のもと」等

##### 得意なことを生かし、自信をもたせる

- 得意なこと、本人の好きなことを発見し、学習に生かし、みんなの前で披露
- ・動物(虫)などの知識
- ・パソコンなどの知識・技能
- ・漢字・ことわざの知識

##### 注意の持続時間を配慮した課題を与える

- 一律同じ量の課題を与えるのではなく、子どもの力を見極めたうえで配慮
- ・枠で囲って量を示す
- ・文字を大きくして、問題数を減らす

#### 5 薬物療法

ADHDの治療薬として、最もよく使用されているのが、リタリン(一般的にはメチルフェネート)と呼ばれる中枢神経を刺激する薬です。米国でもADHDの治療の90%以上にリタリンが使用されています。また、リタリンは、ADHDの70~80%に効果があることが分かっています。こうした薬は症状の一時的な改善には効果がありますが、注意欠陥多動性障害を治す薬ではありません。また、学力の向上や社会的なスキルの獲得ができるようになる薬でもありません。注意欠陥多動性障害の問題は薬物だけで解決できるものではなく、教育とのかかわりの中で効果を上げることを再認識しなければなりません。

##### 【期待できる効果】

- ・多動性 ・注意力の持続時間 ・衝動性 ・指示に従うこと ・攻撃性
- ・親や友人との関係 ・課題や宿題をきちんとこなす能力

##### 【改善が難しい点】

- ・読解力 ・社交性、社会性 ・学習障害 ・理解力や思考力を伴う学力

# 高機能自閉症・アスペルガー障害の理解と指導

## 1 高機能自閉症の定義

「高機能自閉症」とは、3歳位までに現れ、他人との社会的関係の形成の困難さ、ことばの発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的機能の発達の遅れを伴わないものをいう。

「特別支援教育の在り方に関する調査協力者会議」 H15.3

高機能自閉症児とアスペルガー障害児を見た場合、アスペルガー障害児は高機能自閉症に比べて言語発達が良好なのが特徴です。しかし、厳密に区別することが難しいため、同じ概念で扱うケースが多くあります。ここでも、以下「高機能自閉症」とまとめて扱います。

## 2 アスペルガー障害

アスペルガー障害は、自閉症の三つの主症状（対人関係の発達の偏り、コミュニケーション能力特に言語能力の発達の偏り、想像力の障害及びそれに基づく行動の障害）のうち、コミュニケーションの障害が軽微なグループだと言えます。言語発達の遅れは少なく、知的には遅れが少ないことが多いです。しかし、自閉症と同様の生来の社会性の障害をもち、また、興味の著しい偏りやファンタジーへの没頭があり、時には儀式行為をもちます。

## 3 高機能自閉症児の特性

高機能自閉症の中心的な症例は次の2点にまとめることができます。

強い自己中心性や人間関係が築けないといった、対人関係にかかわる障害  
興味・関心に狭さや生活面行動面での固執にかかわる障害

具体的には次のような特徴が見られます。

- ・変化を嫌う
- ・対人関係のルールの理解が難しい
- ・表情や身ぶりが乏しい
- ・興味が限られている
- ・協調運動がうまくいかない
- ・あいまいなことが理解できない
- ・何が重要なことが気づくことができず、時に重要でないことに集中することがある
- ・知能に遅れはないが、教科によって学業不振になりがちである
- ・心が傷つきやすい

## 4 高機能自閉症児への指導のポイント

先に述べたように、高機能自閉症児は、基本的には自閉症と同じ特性をもっているため、自閉症の特性に対する支援やかかわり方がそのまま適用します。しかし、知的に遅れはないとは言え、一人一人の状態に合ったかかわり方を考える必要があります。

【学力の困難は目立たないが、不適応行動が顕著な場合】

- ・この場合にはソーシャルスキル・トレーニングや小集団での活動を通して、行動の改善を図ることが大切です

【自分が人と違うことに悩んでいる場合】

- ・カウンセリングを含めた対応が大切です



【学力に困難がある場合】

- ・認知発達の偏りが予想されますので、特性を心理検査などで知りそれに応じた学習指導の方法、課題解決の方法を身に付けさせることが大切です
- ・抽出した個別の指導(特別支援学級入級)を検討することも考えられます

### — ソーシャルスキルトレーニングの必要性 —

高機能自閉症児の中には、正常範囲内の知的能力を有し、基本的な生活習慣の自立も可能で、通常の学級へ在籍する子も少なくありません。しかし、認知能力の偏りや、相手の感情や行動の意図を察すること、相手の反応を予測しながら、自分の振るまい方を調節することの難しさなど、社会性の問題は残されたままであり、特に小学校高学年から中学校以降、学級集団の中で困難さが顕著になってきます。そのため、自己コントロールや対人スキルをはじめとする常識的な社会的スキルを身につけることは、学習や生活習慣のスキルと同様に必要です。



## 援助を必要とする子どもへの具体的支援（目的別）

指導上特別な配慮を必要とする子どもたちすべてにあてはまる指導原理をあげてみました。「あたりまえのことじゃないか」「もうわかっていることばかり」と思われるかも知れません。しかし、そんな簡単なことを大切に一人一人に応じた手だてを考えていくことこそが、実はもっとも重要なことなのです。

### 1 学習意欲を高めるための支援

成就感や自信  
をもたせる



- ・児童生徒の得意な面の発揮場面を意図的に設定する。
- ・発言、発表の機会を意図的に設定する。
- ・得意な面を伸ばして自信をもたせる。
- ・学習過程での望ましい行動に対して評価、賞賛する。
- ・周りから認められる場を設定する。

見通しをもた  
せる



- ・1日の予定を知らせたり、学習の手順や方法とともに考える。
- ・学習に具体的なめあてをもたせる。

### 2 学習課題に取り組むための支援

自立性を育て  
る



- ・係活動などをやり遂げられるように工夫する。
- ・具体的なヒントを示すなどして、自分で考えたり、判断できるようにする。

### 3 注意を喚起させるための支援

学習環境を整  
える



- ・落ち着いた生活の雰囲気を作る。
- ・1日に何回か評価される機会を設定する。
- ・学習場面で必要なもの以外は、机の上から片づける。

### 4 友達とかかわるための支援

集団構成を工  
夫する



- ・グループ活動を積極的に活用する。
- ・ペアを組む児童生徒を工夫する。
- ・友達とのやりとり場面をとおして、どう対処するのかをその都度説明し理解を促す。

### 5 情緒的な安定を図るための支援

安心感をもた  
せる



- ・学習の中断や新しい経験などに対して理解を促すとともに見通しをもたせたり、安心感をもたせて取り組ませる。

共感的にかか  
わる



- ・かかわる者が心理的に安定し、ゆとりをもつ。
- ・不適切な行動を起こした場合、その気持ちを受け止めるとともにことばや選択肢から自己表現できるように促す。

原因を把握す  
る



- ・情緒面で不安定になる場合、その原因を多角的に把握し、周囲の人が一貫して対応する。

## 援助を必要とする子どもへの具体的支援（能力別）

### 1 「聞くこと」への支援

- ・話す前に声をかける ・聞き返す練習 ・視覚的情報の提供 ・メモの活用
- ・自分の中で確認する習慣

### 2 「話すこと」への支援

- \* 「聞くこと」への支援の必要性を確認
- ・選択肢を与える（誘導するのではない） ・ゆっくり正しく言い直し ・正しい構文づくりの練習

### 3 「読むこと」への支援

- ・本人の読みやすい大きさに拡大 ・文字や言葉を意味づける ・読ませる課題の量を調整
- ・独自の軽減方法（指でなぞる、余計な文章は隠す、読みやすい角度等）

### 4 「書くこと」への支援

- ・鉛筆の握り方 ・用紙の工夫（罫線、升目） ・目と手の協応運動の強化 ・書き順を重視
- ・基本は「ゆっくり、ただしく、あせらず」 ・対象の強調（板書等）

### 5 「計算すること」への支援

- ・具体物でのイメージ化 ・基礎基本の復習 ・計算機の使用 ・見直しの習慣

## 各障害のかかわりとその原因、二次的な障害

### 1 各障害のかかわり

先に述べた各障害の特徴に見られるようにLD、ADHD、高機能自閉症には、共通した内容があります。

(図3参照)

これは、脳の器質的なダメージがわずかであるとともにダメージを受けた箇所が共通しているに関係していると考えられています。そこで、LDや他の障害を明確に区別することが難しい場合などもあります。(図4参照)

現在、さまざまな調査結果が出されています。LDの約半数がADHDをを合併し、ADHDの50～80%がLDを合併しているとの報告がなされている研究もありますが、詳しいことは分かっていないのが現状です。

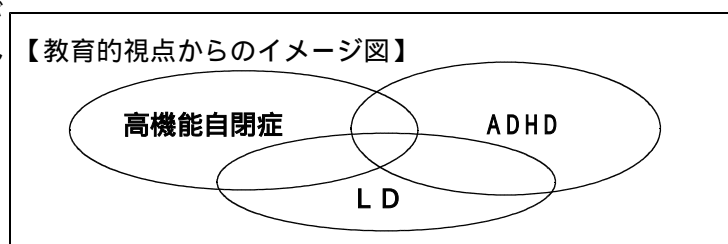
図4 各障害のかかわり

	学力の特異な困難	注意集中困難多動	社会性・対人関係の困難	運動能力の困難	こだわり・固執
LD					
ADHD					
高機能自閉症					

- 主な障害としてあらわれる領域      - 付随する障害としてあらわれる領域

図3 各障害別問題のあらわれ方

【教育的視点からのイメージ図】



## 2 原因

LD、ADHD、高機能自閉症は、脳の中枢神経系の機能障害と推定されています。脳の発達の未成熟や神経伝達物質の異常などがその原因と考えられています。

そのことに起因して、情報（視覚・聴覚等）の認知過程で情報を受け止め、整理し、関係づけ、表出する過程のいずれかが十分機能しないことが推定されています。その結果、学習上の基礎的能力の習得と使用の著しい困難や行動面での不適応となって表れると考えられます。

## 3 二次的な障害

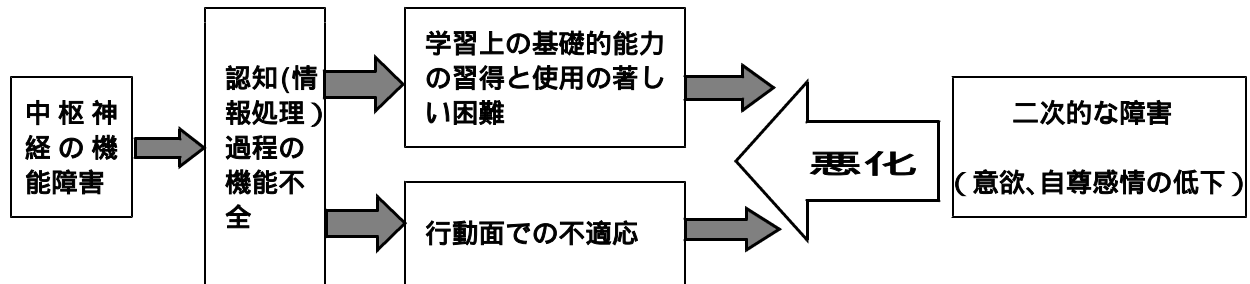


図5 障害の基本的な原因

周囲の不適切な対応や、さまざまな失敗経験の累積や周囲の無理解によるいじめなどによって、自尊感情や意欲の低下など二次的な障害が表れ、加齢とともに反抗挑戦性障害（大人に反抗したり突発的な乱暴な行為などが頻発したりする障害）や行為障害（恐喝やけんかを繰り返すなど違法行為を繰り返す障害）へと移行していくケースもあります。（図5参照）

複数の調査研究によると、反抗挑戦性障害の30～50％は数年後に行為障害と診断され、行為障害と診断される子どもの80％は先だって反抗挑戦性障害と診断されていたと報告されています。そのため、発達障害と反抗挑戦性障害、行為障害の間には、時間的な経過とともに、発達の、階層的関係があると指摘する研究者もおります。

行為障害に対する治療の有効性の低さ、困難さは共通して言われています。これは、子どもが成長するにつれて人格が固定化し、問題行動に変化が生じにくくなるためと言われています。そのため、治療効果が見込める反抗挑戦性障害の段階で早期に発見し対応していくことが重要となります。反抗挑戦性障害は行為障害に至る臨界点であり、行為障害を予防し軽症化できる最後の段階とも言われています。いずれ、発達障害のある子どもにはこうしたマイナスの可能性もあることをしっかりと認識し、早い段階での適切な対応が必要だと言えます。

## ～ 参 考 ～

- まず授業の基本を！ -

前略 ～対象となる子どもの学習する教室に案内されると二通りの授業の光景を目にした。まず、あの子です、と対象児を指摘されなければ気づかないほど、対象児が他の子ども達と同程度に集中している授業だ。そのような教室では周囲の子ども達もしっかり学習に取り組んでいる。一方、その反対の授業もある。対象児を指摘される前に一目瞭然、対象児が授業に集中せず、机に顔を伏せたり、立ち歩いている授業だ。そのような教室では、全体的に落ち着かず、ざわついているという印象を受ける。

この差は何に由来するのだろうか。～ 中略 ～むしろ担任教師の授業の仕方に原因を求めた方が適切であろう。すなわち、学習ルールが学級の子供達に定着しており、授業が子供達に理解しやすいように構成されており、子供達への教師の指示や説明が簡潔明瞭である。また板書の仕方でも構造化されており視覚的教材が適切に取り入れられている。このような授業においては多くの発達障害児もある程度は授業に集中して取り組めるということだ。一方、その逆の授業では、障害のない子供達も集中して授業に取り組めない状況になってしまう。

発達障害児が集中して取り組める授業は、障害のない子供達にとっても集中して取り組める授業であり、質の高い授業であると言える。教師は発達障害児への個別的な支援の必要性を強調する前に、もう一度自分の授業を見直し、授業の原点に立ち戻ることが求められる。

東北福祉大学特別支援教育研究センター 阿部 芳久

## 【主な引用・参考文献】

- 「特別支援教育推進基礎資料」 文部科学省初等中等教育特別支援教育課
- 「今後の特別支援教育の在り方（最終報告）」 今後の特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議
- 「岩手県におけるこれからの特別支援教育の在り方」 岩手県特別支援教育プラン策定委員会
- 「特別支援教育のための精神・神経医学」 杉山登志郎・原仁共著 学習研究社
- 「改訂 特殊教育の展望 - 障害児教育から特別支援教育へ - 」 山口薫・金子健共著 日本文化科学社
- 「特別支援教育と障害児教育」 清水貞夫著 クリエイツかもがわ
- 「学習障害・学習困難への教育的対応」 山口薫編著 文教資料協会
- 「LD（学習障害）の子どもたち」 茂木俊彦監修 上野一彦編 大月書店
- 「学級担任のためのLD指導Q & A」 上野一彦編 教育出版
- 「LD・ADHD特別支援マニュアル」 森孝一著 明治図書
- 「ADHDサポートガイド」 森孝一著 明治図書
- 「通常の学級におけるAD/H Dの指導」 全国情緒障害教育研究会編 日本文化科学社
- 「アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート」 杉山登志郎編著 学習研究社
- 「教室でできる特別支援教育のアイデア」 中学校編 月森久江編集 図書文化社
- 「LD & ADHD」 2007 7月号 明治図書